

ハタハタ満喫体験、農家との共同生活、かまくら作り、天体観測、発酵食品作り。バラエティーに富んだメニューが並ぶ。県立大で昨年十二月から始まった学生支援プログラム「薫風・満天フィールド交流塾」の活動の一部だ。

一見、共通点はないが、キーワードは「遊び」。自然の中に出たり、社会との交流など実体験を通して学生たちの行動力やコミュニケーション能力、社会性などを養うことが狙い。単位とは全く関係なく、学生の人間力を高めようという取り組みだ。

大学側が学生の「面倒」をこそまでも思ってしまうが、同大アグリ

地方点描

「遊び」

ビジネス学科准教授の露崎浩塾長は「以前は当たり前前に体験できるような遊びを知らないまま育ってきた学生が多い。本などで学んではいるが、実体験が不足している。何事に対しても心から『やってみよう』という気持ちが生まれにくいのではないかと説明する。

これまで六回の活動では「自分だけではできないことが、用意されていて体験できる」と気軽に参加する学生もいれば、「『食』に興味があり体験を将来に結び付けたい」など

とさまざま。交流塾は既知の解答を導き出すテストとは異なり、活動結果を評価することは難しい。「そもそも遊びに目的はない。楽しむ中で自然に行動力を養ったり、思い出たなって振り返ったとき、個々のエネルギーにしてほしい」と露崎塾長。

部活に打ち込み、その合間に授業に顔を出していた自らの学生生活を振り返れば、良くも悪くもその経験を人生の糧にするしかなかった。「遊び」でも夢中になれば学生自身何かを感じられるはず。そうして得たものはきつと心に残るだろう。経験を今後どう生かすかは自分次第である。（男鹿支局長・椎名博樹）